

系統性をふまえ、一人ひとりの育てたい力を 明確にした国語科の指導

○田村 裕子*1

有井 香織*1

川間 健之介*2

宇野 彰*1,2

(筑波大学附属桐が丘特別支援学校*1) (筑波大学人間系*2)

KEY WORDS: 基軸 指導の重点化

【目的と考え方】

本研究は、当該学年の目標及び内容、進度での学習が難しい児童生徒達を対象とし、そうした児童生徒達が一歩一歩着実に国語科の目標に迫るための指導の在り方について探究したものである。

その前提としては、「L字型構造」(図1)の指導が必要である。これは、各教科等の目標・内容等の系統性という縦の基軸と、身体状況や認知特性、経験、学びの実態というような一人ひとりの個別的な要素という横の軸とが交わったところに、個に応じた適切な指導目標・指導内容を設定し、必要な手だてを講じた授業作りが可能であるという考え方であり、筑波大学附属桐が丘特別支援学校では、すべての授業において「L字型構造」の授業作りを行っている。

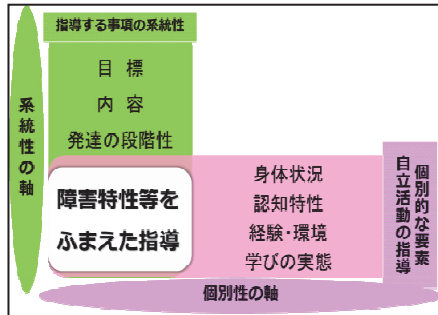


図1 桐が丘L字型構造の指導・授業作り

また、特に対象の児童生徒達においては、学習指導要領に示されている全ての内容を網羅的に指導しても結局何が子ども達に身に付いたのかが不明確である

ということが往々にしてあり、指導の重点化ということが必要となってくる。

対象の児童生徒達には、国語科として育てたい力、そして、その力を育むために重点を置く指導目標・指導内容を明確にした指導がより重要になってくる。

そうした指導のためには、教科の内容の系統性を整理するということが、児童生徒達のつまづきの特徴を踏まえ、どこを重点的に指導するのかということ整理することが求められる。

【方法】

対象の児童生徒達においては、国語科の全領域(「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」)において、「まとまりをつかむ」「関係性をつかむ」「まとめる」ことにつまづきが見られることが多い。その要因は、情報を同時処理的に扱うことの苦手さや、具体的観点と抽象的観点を行き来させて物事を捉える思考の弱さ、肢体不自由ゆえの経験の不足から学習が進まない結果であることなどが挙げられる。

ただし、身に付きにくい学習事項をただ繰り返し指導するだけでは、なかなか学習したことは定着しない。児童生徒が着実に力を身に付けていくためには、設定した指導目標や指導内容が教科の目標や内容の系統に沿ったものでなくてはならない。そこで、当校の国語科では、「国語科の重点化した指導内容の大まかな流れ図」(図2)「指導内容重点項目の系統表」を作成し、教科の内容の系統性を整理し

た。(筑波大学附属桐が丘特別支援学校, 2016)

「国語科の重点化した指導内容の大まかな流れ図」は、対象児童生徒のつまづきの特徴を踏まえ、小学校学習指導要領に示された国語科の内容の中でも特に重点を置いて指導すべき内容を、大まかに3つに段階化して整理したものである。さらに「指導内容重点項目の系統表」は、その3つの段階に内在するより詳細な指導項目を示したものである。これらの図表は、指導者が指導の基軸を得たり、的確な実態把握を行ったりする際に活用するとともに、国語科として育てたい力やそのために必要な指導事項を導き出すために用いるものである。

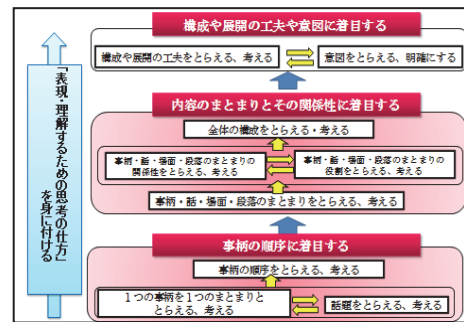


図2 国語科の重点化した指導内容の大まかな流れ図

指導はこれらの図表を活用して、以下の流れで取り組んでいる。

- ① 個別の指導計画等より、対象児童生徒の全般的な様子、指導の方向性、手だて・配慮を確認
- ② 「国語科の重点化した指導内容の大まかな流れ図」や「指導内容重点項目の系統表」を活用し、国語の内容の系統に沿って、対象児童生徒の国語の学習の習得状況を把握
- ③ ①②から、国語科として育てたい力及び年間・単元で重点を置く指導目標・指導内容を設定
- ④ ①を参考に、指導内容に対して、指導目標を達成するための有効な指導方法を検討
- ⑤ 指導と評価活動を繰り返しながら、より適切な指導目標・指導内容及び指導方法を検討

【結果と考察】

指導者が、児童生徒の個別的な要素・実態を把握するとともに、図表などにより、国語科の教科の特質と内容の系統性をふまえることによって、一人ひとりに応じて、国語科として育てたい力が何で、そのために、「何を」「どのように」指導するのかということを明確にした指導が可能になった。そして、そうした両者を踏まえた「L字型構造」の指導・授業作りによって、児童生徒は行きつ戻りつしながらではあるが、一歩一歩着実に力を伸ばしており、そうした指導・授業作りの有効性を示すことができたと考える。

【引用文献】

筑波大学附属桐が丘特別支援学校(2016)研究成果報告書。(TAMURA Yuko, ARII Kaori, KAWAMA Kenosuke, UNO Akira)